

別事特記

グンドラ・ヤノヴィッツ×クリスタ・ルートヴィヒ

取材・文・写真 野村三郎
Text Saburo Nomura

写真提供 ウィーン国立歌劇場

「宮廷歌手」の称号を持つ往年の名歌手二人、グンドラ・ヤノヴィッツとクリスタ・ルートヴィヒがウィーン国立歌劇場で対談を行った。ベルリン出身のヤノヴィッツとグラーツ出身のルートヴィヒ、カラヤンとベームそれに見出された二人が、1950〜80年代に同歌劇場で活躍していた時代の数々のエピソードが披露した。

10月11日、ウィーン国立歌劇場で満員の聴衆を集めて往年の名歌手、グンドラ・ヤノヴィッツとクリスタ・ルートヴィヒの対談が行われた。この二人は1950年代から1980年末までウィーン国立歌劇場になくてはならない存在であり、この歌劇場の歴史に永遠にその名を留めるであろう宮廷歌手の称号をもつ大歌手であった。しかもカラヤンが総監督をしていた57年から64年までと再び彼がここに復帰した79年から80年までが、この両名歌手の最盛期でもあった。当日はルートヴィヒが聞き役になり、ヤノヴィッツが相手を務めた。後に大きなヤノヴィッツの横顔が映し出され、その前で対談が始まった。

ヤノヴィッツは1937年ベルリンで生まれた。幼くしてグラーツに移り、この地で育った。59年カラヤンに見出され、ウィーン国立歌劇場の研究生となり、60年に《フィガロの結婚》のバルバリーナでデビューした。同年バイロイト音楽祭の《バルジファル》の花の乙女でもデビューを果たした。63年フランクフルト歌劇場に所属し、66年にはベルリン・ドイツオペラに所属した。彼女のウィーン国立歌劇場での主な経歴は《フィガロの結

Gundula Janowitz×Christa Ludwig



ウィーン国立歌劇場の一時代を築いたグンドラ・ヤノヴィッツとクリスタ・ルートヴィヒ(右) 10月11日・ウィーン国立歌劇場

婚》(伯爵夫人71回、ケルビーノ15回、以下同)、《ナクソス島のアリアドネ》(48回)、《ばらの騎士》(元帥夫人43回)、《魔笛》(第1の侍女35回、パミーナ22回)、《アラベラ》(29回)、《カプリッチョ》(伯爵夫人27回)、《ドン・ジョヴァンニ》(ドンナ・アンナ27回、ドンナ・エルヴィラ5回)、《椿姫》(フロローラ21回)、《コジ・ファン・トゥッテ》(フィオルデイリ18回)、《ドン・カルロ》(エリーザベト8回、天の声18回)、《売られた花嫁》(マリ12回)、《ワルキューレ》(ゲルヒルデ13回) など合計47の役で692回出演している。

この他多くの録音を残しバッハ《マタイ受難曲》、「ミサ曲」口短調、ハイドン《天地創造》《四季》、ベートーヴェン《フィデリオ》、「交響曲第9番」《ミサ・ソレムニス》、ブラームス《ドイツレクイエム》、ワーグナー《ワルキューレ》、《神々の黄昏》、R・シュトラウス「4つの最後の歌」をカラヤンの指揮の下演奏している。上記のオペラの多くはカラヤン指揮で行われ、ヤノヴィッツはカラヤンを師と仰いでいる。

一方、ルートヴィヒを見出したのはカール・ベームであった。彼女は1928

年ベルリンで指揮者の父、アルト歌手の母親の下に生まれ、隣の部屋でレッスンを聴きながら育ったので、それらを楽譜を見ないで暗譜するという恵まれた環境に育った。彼女のデビューは46年フランクフルト・アム・マイン歌劇場での《こうもり》のオルロフスキーであった。54年ハノーファー歌劇場に、翌55年ベームによりウィーン国立歌劇場に招かれ、以来94年の引退まで幅広く活躍した。

ウィーンでは《コジ・ファン・トゥッテ》(ドラベラ58回)、《魔笛》(第二の侍女57回)、《ばらの騎士》(元帥夫人21回、オクタヴィアン56回)、《フィガロの結婚》(ケルビーノ51回)、《エレクトラ》(クリテムネストラ49回)、《カプリッチョ》(タラリオン36回)、《ドン・カルロ》(エボリー姫32回)、《カルメン》(カルメン28回)、《ワルキューレ》(フリッカ26回)、《ナクソス島のアリアドネ》(作曲家26回)、《ファルスタッフ》(ミセス・クイックリー22回)、《チェネレントラ》(アンゲリーナ21回)、《アイター》(21回)とソプラノからメゾソプラノの領域まで幅広く歌っており、43の役で770回も出演している。もちろんカール・ベーム指揮はもとより、カラヤン指揮の下でも多く演奏した。

この二人は国際的名声を持つあらゆる歌劇場、音楽祭に出演している。二人がウィーン国立歌劇場の舞台で共演したのは80回、30年にわたる。二人の初めての共演はカラヤン指揮の1960年《神々の黄昏》で第二のノルンとヴォークリン



ヤノヴィッツが「話し手」、ルートヴィヒが「聞き手」というスタンスで会が進められた

デであった。最後はホルスト・シュタイン指揮の下87年または《神々の黄昏》のワルトラウテとグートルーネであった。話は当然のことデビューから主にカラヤンを巡って交わされた。話の途中で背後のスクリーンにヤノヴィッツの演ずる舞台が映し出され、時に録音も流された。

中でもヤノヴィッツといえば話題になる《フィガロの結婚》の伯爵夫人のアリア《楽しい思い出どこへ》の抑制のきいたエレガントな場面は、かつての彼女の歌手としての最高の瞬間をありありと思ひ出させてくれ、満場割れるような拍



往年の大歌手をひと目見ようと、ウィーン国立歌劇場にはたくさんの人々が詰めかけた

手が沸いた。この時ほど二人のオペラを留学時代しばしば聴いたことの幸運を思わずにはおれなかった。二人も当時のことが思い出されたようで、カラヤンの指揮ぶり、練習、本番の様子に話は及んだ。カラヤンは帝王と呼ばれ、我々には近寄り難いイメージがあるが、話に登場するカラヤンはまったく異なり、歌手に対しては思いやり深い人物像が浮かんできた。一方、カラヤン時代のワーグナー《指環》に二人とも出演しており、こういう話は興味深かった。

二人ともオペラだけでなく歌曲、オラトリオ、ミサ曲の世界でも活躍しており、

また63年には一緒にカラヤン指揮の《第九》を共にザルツブルク音楽祭で共演してもいたのだ。共演といえば、メトロポリタン歌劇場では67年に《指環》で、ジークリンデとフリッカでデビューもしていたのだ。現代の奇妙な演出などなかった最高の時代を築いた共演者の思い出は尽きることなく、内容豊かで聴衆にかつての時代を甦えらせてくれた。これらの名歌手たちのかつてのエレガントで美しい時代は去ってしまったが、何時までも伝説として語り継がれるであろう。感銘深い一夜であった。